

放棄地で育てエコ燃料

茨城大、阿見で「スイートソルガム」栽培構想

阿見町の耕作放棄地で巨大な植物「スイートソルガム」を栽培し、バイオエタノールを精製する構想を茨城大学が進めている。ガソリンと混ぜて車を走らせることで、二酸化炭素(CO₂)の排出量を減らす計画だ。阿見町側は田畑の再生に期待を寄せている。

(吉野慶祐)

バイオエタノールはトウモロコシやサトウキビなどから作られるアルコールで、主に車の燃料に使われる。原料の植物は生育時にCO₂を吸収

するため、環境への負荷が少
ない燃料として各地で利用が
進んでいる。表

茨城大が着目したスイート
ソルガムは、アフリカ原産の

イネ科作物。高さは5メートル、サトウキビを大きくした外形だ。糖分が多く砂糖モロコシとも呼ばれるが、サトウキビの定着で、製糖用として



高さ5メートルに達するスイートソルガム。女性が持つ2メートルの棒をはるかにしのぐ。茨城大提供

町、田畑の再生に期待

■バイオエタノールを作る各地の取り組み
(いずれもガソリンに3%混ぜ使用)

	原料	利用状況
堺市	建築廃材の木材	月3万3千台の車に給油
沖縄県・宮古島	サトウキビの搾りかす	島内4カ所の給油所で販売、月300台が利用
新潟県	飼料米	J A全農(東京)が精製。県内のJ A系給油所で今夏、販売予定

は国内では影が薄かった。ただ、エタノール原料としてはサトウキビより優れているという。茨大の実験では、生育期間は約4カ月で、サトウキビの3分の1以下ですむ。エタノール収量は1畝あたり5ト前後で、サトウキビと同等だった。

最大の利点は、温暖な土地でしか育たないサトウキビと違い、日本全国で栽培できることだ。食用でないため、米園

のように大量のトウモロコシをエタノールに加工し、飼料価格高騰を招く心配もない。

研究を進める新田洋司教授(46)らは農学部地元の阿見町で耕作放棄地を借り、早ければ今夏にも栽培を始めたという考え。秋に刈り取り、県工業技術センターに依頼してエタノールを精製する。茨大や町の公用車のガソリンに3%ほど混ぜて走らせる計画だ。

耕作放棄地の割合が県内市町村で3番目に多い阿見町にも利点がある。町は放棄地の再生に協力してくれる農家を探している。

将来精製プラントを建設するとなると、1億円ほどかかる。また、割高なコストが事業の支障になりかねない。新田教授の試算によると、ガソリン50リットルが5千円かかるとした場合、エタノールを3%混ぜると6500円になる。燃料として普及させるには、公的な支援が必要になる可能性がある。